

母ちゃんたちの声 vol.7

福島で母親やってて思うこと。

保養は連続で行くなら年間30日、連続じゃないなら40日。

発酵食品は良いらしい。みそ、ぬかづけ、塩こうじ、しょうゆこうじ、ALL手作り。

とにかくデトックス。うんこだせ。玄米。

アーユルバーダ。ひまし油しっぷ。オイルマッサージ。なんでもやります。

無添加、無農薬、オーガニック、選びます。

そんなんやっても、のうほうありました。半年に一回甲状腺検査やってます。毎回不安です。のうほうあっても、お医者さんに大丈夫だよって言われて、毎回涙。

選ばれないでーって願う毎日。

選ばれないで良かった、って泣きながら運転。

検査のたびに、命の宣告される気分。

福島で生活してるばっかりに……。

福島に生んでしまったばっかりに……。

外で楽しく遊んでいる子どもの姿を見て、私は虐待をしているのかも……と思う。

だって、ベクレルとかシーベルトとかあるやつ触らせているんだから。

だからって、だめだめでは、子どもの気持ち否定することになるし。

福島って自然いっぱいだし、とっても過ごしやすい所なんです。

シーベルトさえなければ暮らすには最高の土地なんですって、自慢できる場所なんです。シーベルトこわいよね、って言えば「気にしている人」っていう枠に入れられて、いやーな目で見られる。めんどくさい奴って言う人もいるんだろうな。

正直気にしないでほしい。忘れたふりしてほしい。だって大変だもん。

保養に申し込むのも、行くのもパワーいるし。疲れるなって思う。

でもそこで出会える優しさがあって、その優しさがあるから頑張ろうって思える。

でも5年たって、保養を維持していくのが大変だって話をよく聞くようになった。

どうにか続けてほしい。

ぶっちゃけ助けてほしい。

こわいよ。

の母



私達「母ちゃんず」は、2011年3月11日の東日本大震災によって誘発された福島原子力発電所の事故によって、高放射線下での生活を余儀なくされている福島の親子を、町田市や相模原市の施設にお呼びして、自然体験キャンプを実施しているボランティアグループです。これまでの4年間で12回のキャンプを行い、延べ581人の親子と共に過ごしてきました。

今回もキャンプの後に、数名の福島の母達にこの冊子のための原稿をお願いしました。キャンプ中には参加者も私達も、ここまで深い話をする事がなかなかできないのですが、こうやって彼女達が紙にしたためた思いを改めて読むと、本当に胸に迫るものを感じます。

東日本大震災から5年しか経過していないのに、熊本でとてつもなく大きな震災が起こりました。過去の大震災に遇われた方々にとっては、苦しかった時間を思い出させる、とてもつらい日々なのではないでしょうか。熊本の方々と一緒に苦しんでいるような気がしているのではないかと想像します。一方で、震災を経験した事がない私達は、実際に経験した方々の苦しみを理解したくても到底できないという、どうしても乗り越えられない壁を感じます。どのような言葉をかけたら良いのか、どのような言葉が相手を傷つけるのか、何をすれば良いのか、何が求められているのか、その場その場で考えていくしかありません。

ひとつだけ確信を持って「できる」と言える事は、「忘れない事」です。関西で、東北で、九州で悲しくつらい日々を送る人々がいるという事を、忘れない事です。そして忌まわしい原発事故をなかったことにしようとする空気にはきちんとあらがい、向き合い、話を聞き、伝えていきたいと思えます。

悲しみには終わりもなく、また別の悲しみが起こったとしても、過去の出来事を消して上書きできるような

ものでもありません。数々の悲しみを学び、それをもって自分達が未来に向かって何ができるのか、感受性を持って生きていきたいと思えます。

2016年6月 母ちゃんず

-2-

郡山の母その1

震災から5年、当時お腹にいた次男は元気な4歳児となり、時が過ぎるスピードを感じています。

大地沢青少年センターにつくとすぐに外遊びへ行きました。

どろだんごを作ったり、落ち葉集めをしたり、おたまじゃくしを捕まえたり、山に登ったり…。たくさんの自然体験が出来ました。

私も自然豊かな福島で育ちました。子どもにもたくさんの自然体験や経験をしてのびのびと遊んでほしいと思っています。しかし今となって福島では放射能汚染が心配でのびのび過ごせません。子どもは大地沢へ来ても、はじめ、落ち葉遊びをする時も、どろ遊びをする時も、「いいの？」って一つ一つ聞いていました。いつも「さわっちゃダメ」と言っているからです。子ども達には福島に住み続ける事を決めた事、申し訳なく思っています。

想像してみてください。

空気や土が訳分からなくキケンな事。

想像してみてください。

地元の野菜や食べ物が安全か分からない事。

想像してみてください。

この先健康被害、どうなるか分からない事。

私もよく分からなく心配が尽きません。どうか子ども達の未来が明るく安全であって欲しいと願うばかりです。

。

私達の住んでいる郡山市は除染も終わりましたが、線量は毎時0.2—0.3マイクロシーベルト。この値を多いか少ないかどう思うかはそれぞれです。最近では話題にしていません。気にしていないのではなく我慢しているのです。言っても何も変わらないし、どうする事も出来ないから…。

母ちゃんずのキャンプに来ると力をもらえます。いつも「福島の事、困っている事、沢山話して教えて」と言ってくれます。見ず知らずの私達の事、気にかけて力を貸して助けてくれます。一人では小さな声でも、色々な人が集まると大きな声になり、何か出来ると思える様になりました。

キャンプに協力頂いたスタッフ、ボランティアさん、協賛下さった皆様、子ども、本当にありがとうございました。親子共に心も身体もたっぷりリフレッシュしました。

ありがとうございました。



子ども達
ユ出来

本宮の母

あの悪夢のような東日本大震災から早いもので5年。

当時4歳だった息子も今では9歳です。

4月で4年生になりました。

ふと気付くと、息子の年月は震災後の方が長くなっていました。

3月11日を迎え、その現実を目の当たりにした時、私は全く実感が湧きませんでした。

それはどうしてだろう？

自分の心に問いかけ整理がつかない日々を過ごしていたある日、九州熊本地震が起こりました。

テレビを通して目に飛び込んできた惨状に、5年前の思いが鮮明に蘇りました。

度重なる余震に、身を寄せ合う母子。

…5年前、私たちもああして震えていた…。

震災後の5年間、子供を守ることにただただ必死で、無我夢中で過ごしてきたんだ…と気付きました。

福島のお母さんたちはもっと怒りの声を挙げるべきだ、と言われることがあります。

あくまでも私個人のことになりますが、目の前の子どもを守ろうと日々精いっぱい、そこまでの考えに至らないのです。

もちろん、原発事故さえなかったら…と思わないわけではありません。

原発事故は、息子からたくさんの自由を奪いました。外遊びはもちろん、屋外での活動は制限せざるを得ませんでしたし、たくさんの我慢も強いたと思います。

震災直後に幼稚園に入園した息子は、今でも逆上がりができません。

外での夏祭りや、プール遊び、いもほり、もちつきもできませんでした。

本来ならばたくさん外遊びすべき時期に、外遊びを制限された子どもの心と体に現れた弊害を想像してみたいと思います。

私たちは安心して子育てがしたい、ただそれだけなのです。

多くは望みません。子どもが健康でまっすぐに成長して欲しい。
それは贅沢な望みなのでしょうか。

子どもを健康に育てたい。だから私は保養に出ます。
子どもの被曝を少しでも減らせるように。
子どもの免疫力が少しでも上がるように。
何より子どもが大自然の中で思いきり走り回る笑顔が見たいから。
福島で、安心して子育てができる！ そう思えるその日まで頑張ります。



郡山の母その2

震災当時のことを思い出すと、とても胸が苦しくなります。母親として我が子になんてことをしてしまったんだという後悔の気持ちが蘇ってくるからです。

原発事故のニュースを最初に聞いたときは、大変なことがおきたと思いましたが、自分たちの身に危険が差し迫っているという認識がまるでなかったです。普段通りの生活を呼びかける国や報道機関のことを鵜呑みにして生活していました。私は当時妊娠中3ヶ月だったにもかかわらずです。つわりが酷く、息子とあまり遊んであげられなかったのが、休日には公園に連れて行って遊ばせることもありましたが、除染もしていない公園で、地面との距離が近い息子がどれだけの量の放射線を被曝したか、おなかの子に影響がなかったのか、想像するだけで怖いのです。なぜ政府は「外に出ない方がよい」と最初から注意喚起してくれなかったのか？ どうして本当のこと、情報を提供してくれなかったのか？ 何で隠したのか？ と怒りがこみ上げてきます。この頃被曝してしまったことを思うと、今気をつけていることは些細なことに過ぎないのではないか、ほとんど意味をなさないのではないかという無力感に襲われることもあります。母親の勉強不足のせいで・・・福島県に住みながら、原発に対して意識がなかったせいで・・・と自分を責めてきました。

震災を乗り越えて、生まれてくるお腹の赤ちゃんはきっと逞しく成長してくれるに違いないと思って出産を楽しみにしていました。しかし、里帰り出産のため、実家に帰省した4日後に心停止、死産でした。直後は「無事に産んであげられなくてごめんね」と辛い日々でした。書を読み、原因不明のケースも多いことが分かりましたが、次第に時間が経つにつれ、原発事故と関連はなかったのか？ という思いが強くなっていきました。死産の原因が不明であるが故に放射線との関連を疑ってしまうからで

す。県立医科大からのアンケートには何度も詳細を綴りましたが、ずっと返答はありませんでした。一昨年、一度お電話をいただき、「調査の結果、流産・死産と原発事故との関連性については因果関係はなし」という返答がありました。アンケート結果をまとめたところ、流産・死産が増えたとの数字は出ていないそう

です。そう聞いても私の心は全く晴れませんでした。それどころかますます不信感が募りました。流産や死産をした母親は精神的ショックも大きく、自分から人に話すことを嫌うし、話す場もない、一方的に送りつけられた記述式のアンケートにどれだけの人が回答したか分からない。それなのに因果関係がないと断言することなどできるのか！と今でも思います。因果関係を証明することなんてできないことくらい分かっています。ただ感情がついていかないのです。因果関係はなしではなく、不明と言ってほしいのです。誰かが話をきりだすと、実は私も・・・と流産や死産の体験を話して、ともに慰め合ったママが数人います。

私が保養という言葉を知ったのは、2013年の春ごろに、公民館で手にした支援団体のチラシでした。直感的に「ここに行きたい」と思いました。でももうすぐ出産のタイミングだったので、生まれた子が1歳くらいになったら行きたいと思いました。今考えると、1年も待たずに上の子を連れて保養に出ればよかったです。乳児を連れて母子で遠くに行くことができると考えていませんでした。それに当時、保養の効果も全く知りませんでした。保養先では、医師の先生と直接お話をする機会をいただいたり、検査をしたり、同じ世代のママたちとの情報交換ができたりと勉強にもなるし、リフレッシュになります。こども同士すぐに打ち解け合って楽しく遊んでいる姿、何のストレスなく、自然の中で過ごせる喜びを感じます。毎回おみやげ

にどんぐりや松ぼっくり、木の枝、貝など拾って、家に持ち帰ってきます。限界まで外で遊んで、お腹がすいてたくさん食べて、疲れ切ってすぐに寝付く。保養先ではいつもこの繰り返し。こどもたちは「楽しい！」「おいしい！」「もっと遊びたい！」と最高の笑顔を何度も見せてくれ、私もつられて笑顔になります。

最後に・・・私は、今後も福島に住み続けようと思っています。放射線のことが気にはなりますが、外遊びもさせていますし、こどもたちは以前とほぼ変わらない生活をしています。ただし、低線量被曝からこどもたちを守るために、母親として、2つのことを必ずやっていこうと心に決めています。こどもたちを保養に行かせることと検査を定期的に受けることです。そのためには支援が必要です。どうか今後も継続的な支援をよろしくお願い致します。



写真：吉田

智彦

<ホームページ> <http://karchanz.jimdo.com/>

<メールアドレス> karchanz@jcom.zaq.ne.jp

<電話> 090-3214-2086

寄付金をお願いします

ゆうちょ銀行 店名：〇二八 店番：028 口座番号：5300021

名義：ツチノコアカチャンズ 一口：1000円

(お名前と連絡先をメールにてお知らせ頂ければ幸いです。)